

互いに足を洗う

加藤 享

【聖書】ヨハネによる福音書 13章 1～15節

さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。夕食のときであった。既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださいのですか」と言った。イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。そこでシモン・ペトロが言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も」イエスは言われた。「既に体を洗った者は、全身清いのため、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清いわけではない。」イエスは、御自分を裏切ろうとしている者がだれであるかを知っておられた。それで、「皆が清いわけではない」と言われたのである。さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。「わたしがあなたがたにしたことが分かるか。あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。

【序】晩餐式への心備え

新しい年も1月があつという間に過ぎて、2月に入ってしまった。この調子ですと、一年が瞬く間に過ぎてしまいそうでいささか慌てています。今日は2月の第一主日でこれから晩餐式を守ります。イエス・キリストが十字架につけられる前の晩、弟子たちと最後の晩餐をなされた時に、「私を記念してこのように行いなさい」（ルカ 22:19、I コリント 11:24～24）とお命じになられた礼典です。

ところがヨハネ福音書によりますと、賛美と祈りをもってパンを裂き、杯を飲む晩餐式の設定記事がありません。そして主が弟子たちの足を洗われた記事が中心になっています。一体どうしたことでしょうか。ヨハネ福音書の意図を

きちんと把握して晩餐式を守りたいと思います。

〔1〕弟子の足を洗う主

主は弟子たちが「あなたこそ私たちが長年にわたって待ち望んできた**メシア（救い主）**です」と告白するようになると、ご自分が祭司長たちによって**殺される**が三日後に**復活する**という**予告**を繰り返し告げ始めました。今日の聖書の書き出しをご覧ください。「さて過越祭の前のことである。イエスはこの世から父のもとへ移る**御自分の時**が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、**この上なく愛し抜かれた。**」この過越祭が**その時だ**とはっきり自覚なされたのです。

そこで弟子たちにしっかり**食事の準備**をするようにお命じになりました。主はまた、弟子の一人**ユダの裏切り**も既にご存知でした。そして父なる神がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、御自分が神のもとから来て、**神のもとに帰ろうとしている**ことを悟っておられました。そこで食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとい、たらいに水をくんで弟子たちの**足を洗い**、腰にまとった手ぬぐいでふき始められたのです。

ユダヤ人は大事な食卓に着くときには、あらかじめ体を洗い、衣服も整えて集ります。しかし舗装されていない道をサンダル履きで歩いてくるのですから、当然足はほこりにまみれます。そこで**奴隷**が玄関で**客の足を洗います**。でもこの時は主と弟子たちだけの食事ですから、奴隷はいません。弟子たちが互いに足を洗い合えばよいのに、誰もそうしようとする者が居なかったようです。どうしてでしょうか。日本ですとこのような時には後輩が先輩の足を洗いますね。

それは弟子たちが**ライバル意識**にとらわれて、**出世争い**が生じてきたからではないでしょうか。共観福音書では、ペテロが信仰告白をし、主が山の上で**栄光に包まれたお姿**になられたのを目の当たりにした後で、弟子たちの出世争いが記述されています。更にルカは、**最後の晩餐の席上**でも「誰が一番偉いかの議論が起こった」（22:24）と記しています。ですから食卓に着く前に仲間の足を洗おうなどという**奴隷の役割り**をする者が現れなかったのでしょうか。しかし主の足さえも洗う者がいなかったとは、どう考えたらよいのでしょうか。

一方、十字架の死とは、この世の**最も惨めで醜く**、また痛の極みまで苦しませる仕打ちです。その十字架につけられ、肉を裂かれ血を流して、ご自分の命を罪の贖いとして与え、すべての人の深い**罪**を清め贖う**救いの業**を果たして、天の父のもとに**帰る時**が、いよいよ明日になることを主は悟っておられます。

しかも弟子たちの中には、**裏切者ユダ**も混じっているのです。弟子たちはそれを知らずに、偉くなろうと張り合っています。しかし主はこのような弟子たちを目の当たりにしながらも、彼らを**この上なく愛し抜かれています**。ですからわが身を**卑しい奴隷の身**にまで落として、愛してやまない弟子たちの足を洗い、手ぬぐいで拭き始めたのでした。ヨハネは**そのお姿に十字架の死を重ね合わせて**記述したのではないのでしょうか。

〔2〕足を洗う意味

「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」——ペトロはじめ弟子たちは、受難の予告を聞かされてきても、この**メシアの栄光の座**につかれのお方を、あの残酷な十字架刑と結び付けて考えることなど出来なかったのです。まして仲間から裏切者が出るなど考えられませんでした。ですから主が**メシアの栄光の座**に着かれた時の自分たちの**席順**の方が、重大関心事でした。その主が自分たちの足をお洗いになるなど、とんでもないことだったのです。

「主よ、足だけでなく、手も頭も」 いかにもペトロらしい言葉です。「既に体を洗った者は、全身清いだから、足だけ洗えばよい。」弟子たちは「あなたはメシア、生ける神の子です」と**信仰告白**をしています。罪を赦された神の民の一員にされています。しかし**日常生活で汚れてしまう罪**を常に洗い清める心がけが必要です。これは私たちにも言われているお言葉ですね。

それにしても、主の逮捕の手引きをした**ユダの裏切り**はどうしたことでしょうか。彼は主に有罪判決が下るや、祭司長たちの所に銀貨 30 枚を返しに行っています。「わたしは**罪のない人**の血を売り渡し、罪を犯しました」しかし受け取られず追い返されて、**自殺**してしまいました。彼のこの言動から推測しますと、ユダはペトロたちよりも**主の受難の予告**を、深刻に受け取ったのでしょう。

メシアが祭司長らに逮捕され殺されるなどおかしい。間違っている権力者に毅然と対決して、**メシアの栄光を現していただかなければ**——そこで祭司長たちに主を逮捕させて、主に**決起**して頂こうとしたのではないのでしょうか。しかし主は水戸黄門とは違いました。十字架で肉を裂かれ、血を流し、**ご自分の愛の命**を罪の贖いとして**与えるメシア救い主**だったのです。

この**十字架の救い**は、ユダばかりではなく、ペトロでも主の**惨めな敗北**に思えて、「弟子だろう」と言われると「違う」と嘘をついて逃げてしまっています。

彼らが**十字架の救い主メシアを信じる**ことが出来るようになったのは、葬られた墓から**復活された主**に出会ってからでした。まさに十字架の救いは、主が足を洗いながらペトロにおっしゃった、「わたしのしていることは今あなたには分かるまいが、**後で分かるようになる**」のお言葉通りの救いだったのです。

このように十字架の救いを理解できない弟子たち、**栄光の救い主**の許で我が身の**栄光・出世を望む弟子たち**には、身をかがめて足を洗う**奴隷の働き**を進んですることなど思いもしなかったのです。そこで主はご自分から弟子たちの足を洗い、「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」とお命じになったのでした。

【結】 主を記念しつつ証に生きる

神さまが、**極めて良いもの**として創造された世界が、**災害・混乱・戦争**の絶えない状態に陥ってしまいました。これは管理せよと命じられた私たち**人間の罪深さ**が原因です。救いを求める万物の叫びに答えて、神さまは人間を**罪から救うために**、救い主イエス・キリストをお送りくださいました。しかし人間はこの救い主を十字架につけて殺してしまいました。イエス・キリストは自分をはりつけて殺す人間のその罪の全てを**我が身に引き受けて**、「父よ、彼らをお赦してください」と祈りつつ、肉を裂かれ、血を流して**贖いの死**を遂げて、信じる者に、**罪の赦しと清めの救い**を与える道を開いてくださいました。

この救いの福音が一人一人の心に受け入れられる時、愛と平和が世界に広がっていきます。最も卑しく惨めな**十字架の死によるイエス・キリストの救い**を覚えつつ、その命に生かされていかなければなりません。共観福音書は裂かれたパンと、杯を頂く晩餐式の礼典を守ることで、**十字架の私を記念し続ける**ようにとの主イエスのお言葉を記しています。

そしてヨハネ福音書は、弟子たちの足もとに身をかがめて、足を洗い清めて下さった主イエスのご命令を心に留めて、奴隷の卑しさに身をおき、**心を低くして他者に仕えていく**ことで、**十字架の福音を証しする**ように教えています。私たちは、苦しむ人に近づけば近づくほど、その人に寄り添って居られる主イエスに近づくのです。主の苦しみ、悲しみに応えて、自分ができることをさせて頂きましょう。**十字架の主を記念しつつ**、足を洗う主に励まされて、心を低くして足を洗わせて頂いて、**十字架の主を証する信仰者**として、日々を送って参りましょう。これが**恵みの良き管理者・スチュワードシップ**です。

完

祈ります

神さま、イエスさまと3年も寝食を共にして信仰を学んだ弟子たちが、結局、身を低くして奴隷の働きをすることが出来ませんでした。イエスさまの足すらも洗おうとしない信仰者でした。私たちはこの事実を、胆に銘じなければなりません。しかしそのような彼らをイエスさまは見限らず、こよなく愛して、十字架の福音の証人に育て上げて下さいました。どうぞ私たちにも寄り添って下さい。そして私たちをも、身を低くして仕える者にして下さい。悲しむ者、苦しむ者、孤独な者に近づくことによって、その人に寄り添うイエス様と出会う者にして下さいますように。このお祈りを、イエスさまのお名前によってお捧げします。 アーメン